

I. JAMSTECの概要

① 事業の概要

■ 事業の目的

国立研究開発法人海洋研究開発機構（Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology : JAMSTEC ジャムステック）は、平和と福祉の理念に基づき、海洋に関する基盤的研究開発、海洋に関する学術研究に関する協力等の業務を総合的に行うことにより海洋科学技術の水準の向上を図るとともに、学術研究の発展に資することを目的として、2004年4月に前身の海洋科学技術センターから独立行政法人として発足し、2015年4月1日に国立研究開発法人海洋研究開発機構に移行しました。

【国立研究開発法人海洋研究開発機構法（平成15年法律第95号）第4条】

■ 事業の範囲

- JAMSTECでは主に以下のような業務を行っています。
- ① 海洋に関する基盤的研究開発を行うとともに、その成果の普及、活用の促進を行っています。
 - ② 大学及び大学共同利用機関における海洋に関する学術研究に対して、船舶の運航等の協力・支援を行っています。
 - ③ 科学技術に関する研究開発又は学術研究を行う方に対し、機構の施設・設備を供与しています。
 - ④ 海洋科学技術に関する研究者及び技術者を養成し、その資質の向上を図っています。
 - ⑤ 海洋科学技術に関する内外の情報及び資料の収集、整理、保管、提供を行っています。
 - ⑥ 科学技術・イノベーション創出の活性化に関する法律（平成20年法律第63号）に基づく出資並びに人的及び技術的援助を行っています。

【国立研究開発法人海洋研究開発機構法第17条】

■ 中長期計画

国立研究開発法人であるJAMSTECは独立行政法人通則法により、主務大臣である文部科学大臣からJAMSTECが達成すべき業務運営に関する目標（中長期目標）の指示を受けます。これを基にJAMSTECでは中長期計画を作成し、中長期目標の達成に向けて業務を遂行します。

2026年4月1日から2033年3月31日までの7年間を対象とした第5期中長期計画には、機構は、科学研究及び技術開発の両輪に、先進的で高い信頼性の研究ファシリティの運用、社会との共創を志向するアドミニストレーションを加えた4つの機能を有機的に連携させるとともに、それらの弛まぬ改革を通じて、研究開発における創発を推進することにより、海洋に起因する地球規模の現象や地球生命に対する理解を深め、科学的知見を蓄積し情報発信活動を推進していくとともに、世界から情報・人材・資金を糾合することにより、技術的な存在意義を明確にすることで我が国や国際社会への貢献の更なる拡大を目指しつつ、近年、AIを科学研究に組み込むことで、研究の範囲やスピードに飛躍的向上をもたらす「AI for Science」の先導的実装に取り組むことが喫緊の課題であることから、これらを通じて、世界をリードする海洋研究開発機関としての存在感を発揮し、国際的なブランド力を高め、我が国の誇りと見做される存在を目指すため、次のような研究開発を実施すると掲げられています。

- ① 地球環境変動の仕組みの把握、地震・火山・津波の発生メカニズムの理解とそれらが引き起こす災害対策への貢献、地球生命の誕生や初期進化とそれに続く海洋生態系の多様化と進化の理解、物質循環像・資源形成機構・環境影響の解明、海洋・地球・生命と人間活動の相互作用とその将来変動の予測や海洋地球デジタルツインの構築などを通じた、地球規模現象の理解と課題の解決に資する研究開発の推進
- ② 上記研究開発によって得られた知的基盤の利活用の推進を通じた、人類の知的資産の創造や新たなイノベーションの創出への貢献
- ③ 調査・観測等により取得したデータの統合及び解析機能の強化による、有用な情報の創生と発信
- ④ 広域かつ大水深への対応が可能な海洋調査・深海探査システムの実現に向け、高精度化、無人化・省力化、効率化、小型化等を目指した工学的な基礎研究や要素技術開発の強化、推進

また、その成果を社会へ広く展開するために外部とのインターフェース機能を強化し、機構をハブとして国内外を問わず産業界、大学、研究機関、省庁、地方公共団体等と共創することに加えて、研究を通じて取得した多種多様な科学的なデータを公開することで我が国のみならず世界の科学の発展に貢献すべくオープンサイエンスを推進するこ

とをもって我が国の海洋関連政策、国際条約や合意文書に貢献するだけでなく、海洋に関する国民の理解、海洋STEAM教育（STEAM教育：各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育）を通じた海洋人材育成に積極的な貢献を果たすことを通じ、機構は世界の平和と人類の福祉に貢献し、世界を

リードする海洋研究開発機関として世界的に認知され、ひいては我が国の誇りとなるような名誉ある地位を占めることを宣言するとしています。

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/project/index.html>】

② JAMSTECの研究・開発事業

■ 研究・開発事業の概要

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/research/>】

CONNECTING OCEAN RESEARCH WITH SOCIETY 社会につながる海洋研究

JAMSTECは海洋国家の日本において、海の研究を通じて、科学技術の向上、学術研究の発展、地球や生命の理解などに広く貢献するための活動に取り組んでいます。

地球環境の把握、海洋資源の利用、地震・火山活動に関する調査研究を進めるとともに、それらの研究を支える探査機・観測機器の運用や技術開発を行い、さらには、革新的な成果や発見につながる最先端の研究を推進しています。また、研究活動によって得られたデータから新たな価値を生み出し、政策的な課題解決や社会・経済のニーズに貢献するための研究開発を進めています。

地球環境研究部門

地球環境の現状を把握しその動態を理解するため、観測や予測にかかる研究開発に取り組む

地球温暖化、海洋の酸性化などの地球規模の課題の解決に貢献するため、国際的な研究枠組みや協力体制を活用し、海洋表層から深層まで地球環境変動に関わる多彩な観測を実施します。併せて、得られたデータを活用して数値実験等に基づく解析によりこの変動の動態を解明するとともに、全球スケール及び海盆スケールの諸現象の予測研究に取り組みます。これらを通じ、地球という惑星がその表面の環境を如何に構築しているか、その仕組みを理解します。

研究成果については、国連気候変動枠組み条約（UNFCCC）・パリ協定、ユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）、北極評議会（AC）などの国際的なフレームワークを通して積極的に発信し、国連持続可能な開発目標（SDGs）、特に目標13（気候変動に具体的な対策を）や目標14（海の豊かさを守ろう）等の達成や、我が国の政策課題の達成に貢献します。

地震火山研究部門

地震や火山活動の実態を解明し、災害の軽減につなげる

日本列島の沈み込み帯で繰り返す地震・火山・津波災害の理解と軽減を目指し、地球表層の現象だけでなく、プレート運動を駆動する地球内部のエネルギー移動・物質循環まで見通した研究を推進します。国の関係機関・大学と連携し、研究船や多様な観測手段で日本周辺～環太平洋の海域調査・観測を実施します。また、リアルタイム観測技術と地下構造モデルに基づく解析手法を開発し、地震・火山・津波活動の現状把握と実態解明を目指します。観測データを統合解析し、地震調査研究推進本部・火山調査研究推進本部等への情報提供を通じて国や自治体等が定める防災・減災施策へ貢献します。

生命地球科学研究部門

地球最後のフロンティア — 深海から紐解く生命の進化と未来へのイノベーション

海洋表層から深海、そして海底下へ。そこは多種多様な生命が息づく地球最後のフロンティアです。

本部門では、世界トップクラスの深海調査機能を駆使し、未踏の極限環境に潜む未知の生態系の発見に挑み、海と生命が織りなす共進化の歴史を解読します。地球規模の環境変動が海洋生態系に与える影響を解明するとともに、独自の進化を遂げた生命機能を活用した新たな研究・技術開発を推進し、人類の知的資産の創造や、新たなイノベーションの創出への貢献を目指します。

物質地球科学研究部門

地球規模の物質動態と資源を解明し、持続可能な未来を築く

物質地球科学研究部門（Institute for Earth and Material Sciences: EMS）では、海洋—地球—惑星システムに分布する多様な天然物質・資源物質・環境負荷物質に着目し、それらの物質循環像・資源形成機構・環境影響の解明を目指しています。そのために、機構がこれまで開発してきた精密な計測技術を高度化し、自然起源および人為起源の物質（元素・分子・同位体）について、水圏—地圏—生命圏の体系的な理解を深化させています。このような研究開発を通して、天然界における物質科学的課題の解決を図り、起源・組成・分布・相互作用を総合的に評価するとともに、その成果を基盤として有用物質の利活用の推進や環境調和的な素材開発への貢献を目指しています。

情報地球科学研究部門

海洋地球の“今と未来”をつなぐデジタルツイン

海洋・地球・生命と人間活動が複雑に影響し合う地球システムを、観測・分析データと先端シミュレーションを統合してデジタル空間に再現し、将来変動の予測と社会課題の解決に資する「海洋地球デジタルツイン」の構築を推進します。物理・化学・生物過程の変化や相互作用を精密に表現する情報地球科学を基盤に、データ科学、数理科学・計算科学を横断的に活用、得られた知見を具体的事例へ適用し、科学的根拠に基づく付加価値の高い情報として効率的に発信します。

変動海洋エコシステム高等研究所

地球環境の変化に対する海洋生態系の応答・適応メカニズムを解き明かし、その変動予測を実現する

東北大学及びJAMSTECが共同で提案した「変動海洋エコシステム高等研究所（WPI-Advanced Institute for Marine Ecosystem Change：以下、「WPI-AIMEC」）」が、文部科学省の令和5年度世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の新規採択拠点として採択されました。

WPI事業は、卓越したリーダーのもと、世界から第一線の研究者が集まる「目に見える研究拠点」を形成し、日本の科学技術水準を向上させていくことを目指す事業です。WPI-AIMECでは、北西太平洋を重点海域と定め、海洋物理観測や環境DNA分析などから得られるビックデータを活用し、海洋環境の物理化学的な変化に対する生態系の応答・適応メカニズムの解明に挑みます。さらに、沿岸域からグローバル・スケールの海洋生態系の変動予測を実現し、新しい学術領域「海洋—生態系変動システムティクス」の確立を目指します。

技術研究開発部門

海洋エンジニアリング研究とシステム開発で、我が国の海洋調査能力の向上を目指す

海洋エンジニアリングに関する基礎研究及び要素技術開発を推進するとともに、それらを活用した深海等の未知の領域を効率的に探査するシステムや、広大な海洋空間を機動的、長期的、自動的に観測・把握するシステムの構築を目指します。

研究プラットフォーム運用部門

海洋調査・観測の最前線を多様なプラットフォームと運用技術で支える

研究船や有人潜水調査船、無人探査機などのさまざまな調査システムを運用し、水深6,000m以深の超深海を含めて海洋全域を調査・観測する高度な能力の維持・向上を図るとともに、世界をリードする海洋に係る研究開発の推進に貢献し、科学技術の発展に寄与します。

■ 研究活動行動規準

JAMSTECでは研究活動における不正行為などに対応するため、2006年度に「研究活動行動規準」を策定し、これに従い研究活動を行ってきましたが、研究者の不正は今もなお社会的に問題となっており、また2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、研究者の社会への発言に対す

る誠実さがより求められること等を踏まえ、日本学術会議が定めた「科学者の行動規範」（2006年10月3日）を参考に、2012年10月に従来の規準を見直しました。【https://www.jamstec.go.jp/j/about/research_activities/】

研究活動行動規準

独立行政法人海洋研究開発機構（以下「JAMSTEC」という。）は、平和と福祉の理念に基づき、海洋に関する基盤的研究開発、海洋に関する学術研究に関する協力等の業務を統合的に行うことにより、海洋科学技術の水準の向上を図るとともに、学術研究の発展に資することを目的としています（独立行政法人海洋研究開発機構法第4条）。

JAMSTECにおいて研究活動に携わる私たちには、前述の目的を踏まえ、新たな真理を発見し、専門知識や技術を活かして人類の福祉、社会の安全と安寧、そして地球環境の持続性に貢献する責任があります。

研究活動は、いうまでもなく研究に携わる者一人一人の誠実性、自律性を基盤として行われるべきものであり、そこに不誠実性が存在することは許されません。特に科学活動とその成果が大きな影響力を持つ現代において、研究者は常に倫理的な判断に基づいて行動しなくてはなりません。

私たちは、ここに日々の研究活動において常に意識すべきことを、「研究活動行動規準」として制定し、その行動を自らが厳正に律する倫理観の確立を目指します。

1. 研究活動に携わる者として、常に誠実性、客観性、透明性をもって研究活動にあたり、課せられた社会的責任を全うします。
2. 研究活動に係る資金については、社会からの負託の基に供与されているものと強く認識し、適正な申請・管理・執行に務めます。
3. 研究活動における不正（研究に関わる捏造、改ざん、盗用、研究資金の不正使用等）を発見した場合には黙認せず、JAMSTECに所属する者として定められたルールに基づき、適切に対応します。
4. 指導的な立場にある者は、JAMSTECの方針に則り、各々の部門において誠実な研究活動を維持向上できる環境の構築に務め、研究活動における不正の余地が生じないよう、日々適切なコミュニケーションを心がけます。

■ 業務の評価

文部科学省所管の国立研究開発法人であるJAMSTECは、毎事業年度及び中長期計画期間の業務実績について、文部科学省の国立研究開発法人審議会の審議を経て、文部科学大臣により評価を受けています。第4期中長期目標期

間及び令和7年度の業務実績に関する評価の概要は以下のとおりです。

【https://www.jamstec.go.jp/j/about/research_assessment/】

文部科学大臣による国立研究開発法人海洋研究開発機構の 第4期中長期目標期間における業務の実績に関する評価

全体の評定：A

<法人全体に関する評価（一部抜粋）>

以下に示すとおり、顕著な成果の創出が認められ、さらに将来的な成果の創出も期待できる業務運営がなされている。

- 海洋調査・観測プラットフォームが無事故で効率的に運用されており、国内外の海洋コミュニティがそれらのプラットフォームを利用することで我が国全体としての海洋科学技術の研究開発成果の最大化に大きく貢献している。特に、研究力、開発力、実行力を統合しなければ実現できなかったIODP JTRACK プロジェクトに象徴されるように、研究開発成果を最大化するための研究マネジメントが適切に図られている。加えて、これまでの常識を覆す数々の科学的意義の大きい成果が毎年のように示されており、能登半島地震や南海トラフ等への対応に見られるように政策に反映されるような科学的知見を迅速に提供していることは顕著な成果と認められる。
- 国際的な枠組みやプロジェクトをリードし、重要な研究成果を数多く創出するとともにIPCCのAR6/AR7のリードオーサーを務めたこと、機構が有する高精度化学分析技術が活用され、小惑星リュウグウの帰還サンプルを解析し、その化学進化を明らかにしたこと、IODP JTRACK プロジェクトを主導し、地震発生過程を明らかにするために必要なデータを全て取得したこと、完全版「深海熱水での生命誕生シナリオ」を提示していることは顕著な成果と認められる。
- 南海トラフ地震臨時情報へ貢献した南海トラフ巨大地震震源域の現状評価、マルチスケール気象解析、JTRACK 断層地震の解明など、重大な成果が複数顕在化しているとともに、論文数増加、被引用数の多い論文が継続的に客観的なアウトプットとして質・量ともに研究レベルの高さを示していることは顕著な成果と認められる。
- 海洋STEAM教育事業を始動し、海洋STEAM事業推進コンソーシアムを立ち上げ、教育系大学との連携を行うとともに、「海洋STEAM教育ハンドブック」を制作・刊行するなど本事業を浸透させる取組を行ったこと、防衛省からの依頼によるF-35A 搜索航海等に迅速に対応するなど、国及び外部機関からの要請に的確に対応したこと、令和6年能登半島地震の震源域周辺海域における緊急調査に機動的に対応し、全7次にわたる緊急航海を完遂したこと等は顕著な成果と認められる。
- 令和5年度に策定された理事長マニフェストを皮切りに、内部統制の強化、意思決定システムの明確化、内外の情報発信の強化、プロジェクトマネジメントの体制整備等の様々な取組を行い、総合的にマネジメントの強化を果たしたこと、特に理事長を頂点として研究、運用、技術、事務を一体化した長期経営エコシステムを構築したことは高く評価できる。
- JAMSTECの「施設30年計画」を国立研究開発法人全体の施設老朽化の実態把握や長期的見通しへと展開して議論を主導し、国立研究開発法人協議会から政府への要望書へという形で結実させた点は、国研全体の共通課題を可視化し、政策的議論につなげる極めて顕著な成果と認められる。

文部科学大臣による国立研究開発法人海洋研究開発機構の 令和7年度における業務の実績に関する評価

全体の評定：A

<評定に至った理由（一部抜粋）>

国立研究開発法人の目的・業務、中長期目標等に照らし、法人の活動による成果、取組等について諸事情を踏まえて総合的に勘案した結果、適正、効果的かつ効率的な業務運営の下で「研究開発成果の最大化」に向けて顕著な成果の創出や将来的な成果の創出の期待等が認められるため。

【評定の区分】

- 国立研究開発法人の目的・業務、中長期目標等に照らし、法人の活動による成果、取組等について諸事情を踏まえて総合的に勘案した結果、
- S：適正、効果的かつ効率的な業務運営の下で「研究開発成果の最大化」に向けて特に顕著な成果の創出や将来的な特別な成果の創出の期待等が認められる。
- A：適正、効果的かつ効率的な業務運営の下で「研究開発成果の最大化」に向けて顕著な成果の創出や将来的な成果の創出の期待等が認められる。
- B：「研究開発成果の最大化」に向けて成果の創出や将来的な成果の創出の期待等が認められ、着実な業務運営がなされている。
- C：「研究開発成果の最大化」又は「適正、効果的かつ効率的な業務運営」に向けてより一層の工夫、改善等が期待される。
- D：「研究開発成果の最大化」又は「適正、効果的かつ効率的な業務運営」に向けて抜本的な見直しを含め特段の工夫、改善等を求める。

③ 組織構成

■ 組織図



(令和8年7月1日現在)

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/organization/>】

JAMSTECの拠点（事業所）



【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/access/>】

■ 研究船・探査機・施設設備

● 研究船・探査機

●地球深部探査船「ちきゅう」

運用主目的	海底下大深度掘削
竣工年	2005年
全長	210.0m
幅	38.0m
深さ	16.2m
満載喫水	9.2m
国際総トン数	56,752トン
巡航速度	8ノット
乗員(うち研究者等)	200名(50名)
推進方式	電気推進
推進装置	アジマススラスト×6基



●海底広域研究船「かいめい」

運用主目的	海底資源調査
竣工年	2016年
全長	100.5m
幅	20.5m
深さ	9.0m
満載喫水	6.3m
国際総トン数	5,747トン
巡航速度	12ノット
乗員(うち研究者等)	65名(38名)
推進方式	電気推進
推進装置	アジマススラスト×2基



●深海潜水調査船支援母船「よこすか」

運用主目的	潜水調査船支援
竣工年	1990年
全長	105.2m
幅	16.0m
深さ	7.3m
満載喫水	4.7m
国際総トン数	4,439トン
巡航速度	12ノット
乗員(うち研究者等)	60名(15名)
推進方式	ディーゼル推進
推進装置	可変ピッチプロペラ×2軸



●学術研究船「白鳳丸」

運用主目的	学術的な海洋観測調査
竣工年	1989年
全長	100.0m
幅	16.2m
深さ	8.9m
満載喫水	6.3m
国際総トン数	4,073トン
巡航速度	12ノット(最大16ノット)
乗員(うち研究者等)	89名(35名)
推進方式	ディーゼル推進 / 電気推進
推進装置	可変ピッチプロペラ×2軸



●東北海洋生態系調査研究船「新青丸」

運用主目的	海洋生物、地球物理・化学、地震などの基礎調査
竣工年	2013年
全長	66.0m
幅	13.0m
深さ	6.2m
満載喫水	4.5m (ソーナードーム含め5.0m)
国際総トン数	1,635トン
巡航速度	10.5ノット
乗員(うち研究者等)	43名(15名)
推進方式	電気推進
推進装置	アジマススラスト×2基



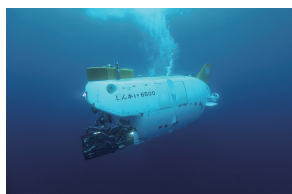
●北極域研究船「みらいII」

運用主目的	氷海域を含む海洋環境変化の調査
竣工年(予定)	2026年
全長	128.0m
幅	23.0m
深さ	12.5m
満載喫水	8.0m
国際総トン数	13,000トン
巡航速度	12ノット
砕氷能力	平坦1年氷1.2mを3.0ノットの船速で連続砕氷可能
乗員(うち研究者等)	97名(63名)
推進方式	電気推進
推進装置	可変ピッチプロペラ×2軸



●有人潜水調査船「しんかい6500」

完 成	1990年
全 長	9.7m
幅	2.7m
高 さ	4.1m
空 中 重 量	26.7トン
最大潜航深度	6,500m
速 力	2.7ノット
乗 員 数	3名
耐 圧 殻 内 径	φ2.0 m
通常潜航時間	8時間
ライフサポート時間	129時間
ペイロード	300kg



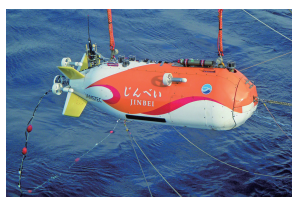
●深海巡航探査機「うらしま8000」

完 成	2025年
全 長	10.7m
幅	1.3m
高 さ	1.5m
空 中 重 量	7.0トン
最大潜航深度	8,000m
速 力	2.5～3.0ノット



●自律型無人探査機「じんべい」

完 成	2012年
全 長	4.0m
幅	1.1m
高 さ	1.0m
空 中 重 量	1.7トン
最大潜航深度	3,000m
速 力	2.5ノット



●無人探査機「かいこう Mk-IV」

完 成	2013年
全 長	3.0m
幅	2.0m
高 さ	2.6m
空 中 重 量	4.8トン
最大潜航深度	4,500m



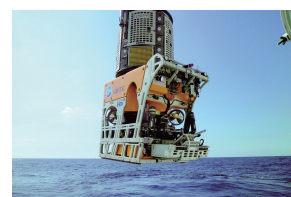
●無人探査機「ハイパードルフィン」

完 成	2000年
全 長	3.0m
幅	2.0m
高 さ	2.6m
空 中 重 量	4.3トン
最大潜航深度	4,500m



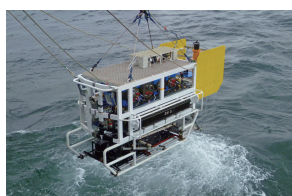
●無人探査機「KM-ROV」

完 成	2016年
全 長	2.9m
幅	1.7m
高 さ	2.5m
空 中 重 量	3.9トン
最大潜航深度	3,000m



●深海曳航調査システム「ディーブ・トウ」

完 成	2015年
全 長	3.3m
幅	1.0m
高 さ	1.2m
空 中 重 量	1.2トン
最大潜航深度	6,000m
曳 航 速 度	～1.5ノット



施設設備

●地球シミュレータ（横浜研究所）

総演算性能 19.5PFLOPS

総メモリ量 556.5TiB

ホーム領域：120TB

共有ストレージ容量 データ領域：60PB

ワーク領域：1.3PB

ノード間ネットワーク帯域 200Gb/s（双方向）



●中型高圧実験水槽装置

本体水槽内有効寸法 内径：約0.6m×高さ：約1.6m

試験体収納力 内径：約0.5m×高さ：約1.4m

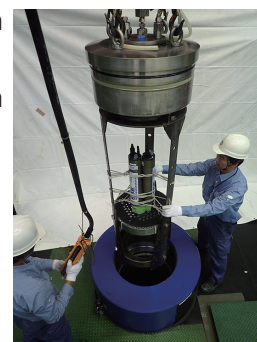
最大圧力 147MPa

加圧(昇圧)速度 0.6～15MPa/min

減圧(降圧)速度 0.6～15MPa/min

保持(保圧)時間 0～5

加圧媒体 真水（水道水）

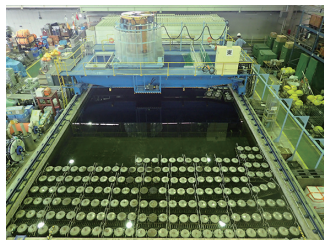


●超音波水槽装置

材質 鉄筋コンクリート

水槽寸法 長さ約9m×幅約9m×深さ約9m

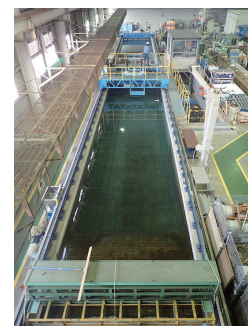
無響装置 壁面（5面）全体に吸音材（マイヤークム）を装備（浅い部分を除く）



●多目的実験水槽

材質 鉄筋コンクリート

水槽寸法 長さ40m×幅4m×深さ2m（一部2.3m）



●多目的プール施設

多目的プール

大きさ 長さ21m×幅21m×深さ1.5m及び3.3m

構造 鉄筋コンクリート（水密）

観察窓 0.4m×0.6m（3カ所）
0.6m×0.8m（2カ所）
0.8m×1.0m（1カ所）

加温 水温30℃まで加温可能



オープンタンク

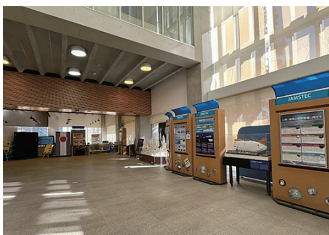
大きさ 内径約3m×水深約2.8m（円筒形）

構造 鋼製

観察窓 直径0.3m（2カ所）



●横浜研究所 地球情報館

概 要	横浜研究所「地球情報館」はJAMSTECが行っている研究や観測によって得られたデータ・映像を活用し、一般向けに提供している展示施設です。1階のエントランスホールでは、JAMSTECの研究開発の内容に関するポスター、船舶やスーパーコンピュータ「地球シミュレータ」の模型、深海で採集された岩石サンプルや海ゴミのサンプルを展示しております。1階の映像展示室では、研究調査で得られた深海の映像や全球レベルでの雲の動きや気候変動のシミュレーションの映像等をご自由にご覧いただけます。※説明員等による案内は実施しておりません。2階には、海洋や地球科学に関する資料を収集し、一般に公開している専門図書館があります。		
開 館 日・ 開 館 時 間	月曜日～金曜日 10:00～17:00		
休 館 日	上記以外の土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始、その他、機構の指定した日		
入 場 料	無料		
			
	エントランスホール展示	地球内部を構成する岩石サンプル	映像展示室

●横浜図書館

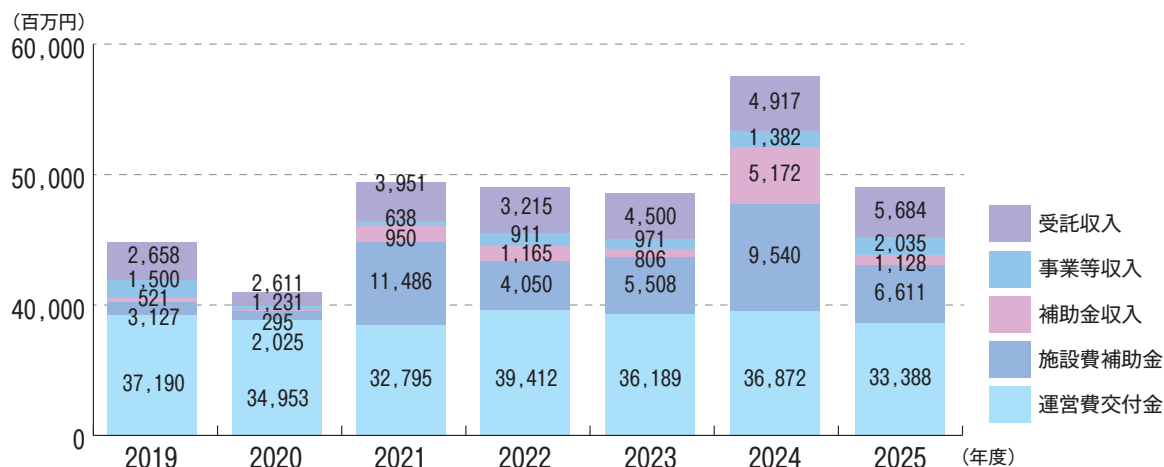
概 要	海洋や地球科学に関する資料を収集し、一般に公開している専門図書館です。一般書、児童書、科学絵本、科学雑誌のほか、機構所属研究者の著書、過去に開催した公開セミナーのDVD等の視聴覚資料も所蔵し、どなたでも自由にご利用いただけます。		
開 館 日・ 開 館 時 間	月曜日～金曜日 10:00～17:00		
休 館 日	上記以外の土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始、その他、機構の指定した日		
			

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/equipment/>】

④ 経営指標

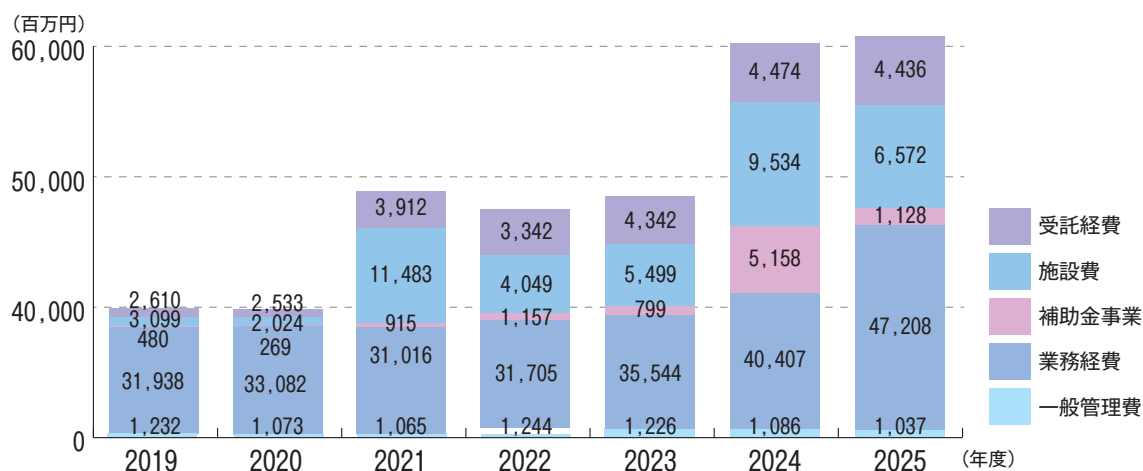
JAMSTEC全体の収入、支出及び人員の推移は以下のとおりです。2004年度より独立行政法人化され、収入及び支出について、以下のような区分で管理しています。

収入



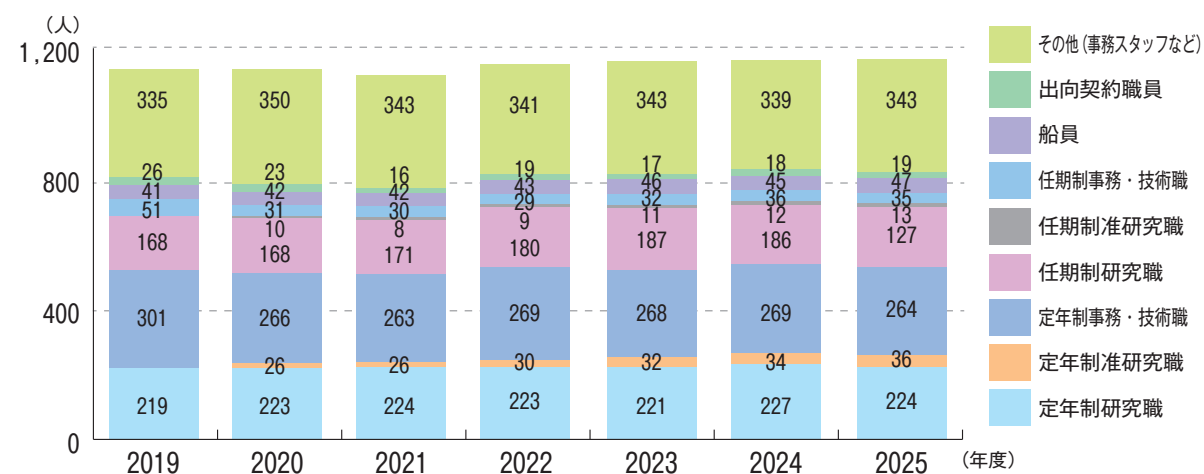
※1 一部事業を翌年度へ繰越したことによる。

支出



※2 一部事業を翌年度へ繰越したことによる。

人員の推移



⑤ 沿革

1971年	10月	「海洋科学技術センター」設立
1981年	10月	「しんかい2000」／「なつしま」システム完成
1985年	5月	海中作業実験船「かいよう」竣工
1990年	4月	「しんかい6500」／「よこすか」システム完成
1995年	3月	10,000m級無人探査機「かいこう」がマリアナ海溝の世界最深部の潜航に成功
	10月	「むつ事業所」開設
1997年	1～2月	ロシア船籍タンカー「ナホトカ号」沈没部調査
	3月	深海調査研究船「かいれい」竣工
	9月	海洋地球研究船「みらい」竣工
	12月	学童疎開船「対馬丸」調査
2000年	10月	「ワシントン事務所」開設 「むつ研究所」発足
2001年	4月	「シアトル事務所」開設
	10月	実習船「えひめ丸」ハワイ沖引き揚げ調査協力
	11月	「国際海洋環境情報センター」開設
2002年	4月	「地球シミュレータ」世界最高の演算性能を達成
	8月	「横浜研究所」開設
2004年	3月	「しんかい2000」退役
	4月	「独立行政法人海洋研究開発機構」発足
2005年	2月	インドネシア・スマトラ島沖地震調査を実施 「うらしま」が世界新記録航続距離317kmを達成
	7月	地球深部探査船「ちきゅう」竣工
	10月	「高知コア研究所」設立
2007年	3月	「シアトル事務所」閉鎖 「しんかい6500」通算1,000回潜航を達成
	9月	地球深部探査船「ちきゅう」による「南海トラフ地震発生帯掘削計画」開始
2008年	2～3月	護衛艦「あたご」と漁船「清徳丸」衝突事故に関する海域調査を実施
	10月	IPCCのノーベル賞受賞に地球シミュレータが貢献
2009年	3月	地球シミュレータ更新
2011年	3月	東日本大震災に関する緊急調査を実施 「ワシントン事務所」閉鎖
	11月	神戸サテライト開設
2012年	3月	自律型無人探査機「ゆめいるか」「おとひめ」「じんべい」完成
2013年	1月	学術研究船「淡青丸」退役
	1～11月	「しんかい6500」世界一周航海「QUELLE（クヴェレ）2013」実施
	3月	無人探査機「かいこうMk-IV」完成
	6月	東北海洋生態系調査研究船「新青丸」竣工
2015年	4月	「国立研究開発法人海洋研究開発機構」に名称変更
	6月	地球シミュレータ（3代目）更新完了
2016年	2月	海洋調査船「なつしま」、海洋調査船「かいよう」退役
	3月	海底広域研究船「かいめい」竣工
2017年	6月	「しんかい6500」通算1,500回潜航を達成
	8月	「しんかい2000」が「機械遺産」に認定
2019年	6月	日本初の海底探査チーム「Team KUROSHIO」が「Shell Ocean Discovery XPRIZE」で準優勝
2020年	2月	スーパーコンピュータ「地球シミュレータ」が「情報処理技術遺産」に認定
2021年	3月	地球シミュレータ（4代目）運用開始
	7月	「しんかい2000」が「ふね遺産」に認定
	10月	真鍋叔郎博士（プリンストン大学、JAMSTECフェロー）が「ノーベル物理学賞」受賞
	10月	JAMSTEC創立50周年
2022年	2月	深海調査研究船「かいれい」退役
2025年	12月	海洋地球研究船「みらい」退役

安全衛生・環境配慮活動の取組み

2003～2005年度	海洋調査観測活動に伴う海洋環境に対する影響等の諸調査を実施
2006年	3月 「環境への配慮に係る基本方針」制定 「調査・観測活動に係る環境保全のための指針」制定
	7月 「安全基本方針」制定
	9月 第1回目の環境報告書を発行
2009年	4月 安全管理の方針等を審議する「安全会議」を「安全・環境会議」に改称
2013年	11月 「音波による構造探査における海洋哺乳類への影響緩和ガイドライン」策定
2014年	4月 「安全衛生及び環境配慮に係る基本方針」制定
2015年	9月 「環境報告書」を「安全・環境報告書」に改称して発行
2018年	6月 「地球温暖化対策実行計画」制定
	12月 SDGsの取組事例を公開開始
2024年	7月 「地球温暖化対策実行計画」改正